

労働者協同組合物語

第3回：コミュニティ実験とオウエン主義協同組合運動

中川雄一郎（協同総研理事長 / 明治大学）

ジョージ・ムーディと協同経済組合

ラナーク州当局によって無視された『ラナーク州への報告』をロバート・オウエンが公表した結果、イギリス社会に1つの歴史的な運動が生まれ、重要な協同思想が体系化されていくことになることは、当のオウエン自身も予想だにできなかったことである。オウエンが『ラナーク州への報告』を公表したのは1821年1月15日から27日の間であるから¹⁾、イギリスの労働者階級 - といっても、産業革命によって危機に晒されている上層労働者や熟練職人たち - がいかに自分たちの利益を擁護する思想体系を待ち望んでいたかが解らうというものである。1820年8月にロンドンの印刷工(植字工)たちは、「労働者階級の状態と社会全体との実質的改善を遂行する」ために彼らの指導者であるジャーナリストのジョージ・ムーディが提案した「協同組合計画」(the Plan of Association)について検討し、彼の「計画」を実行に移すことを決め、翌1821年1月13日に次のような印刷工の『委員会報告』がまとめられ、10日後の23日の集会で「協同経済組合」(The Co-operative and Economical Society)の形成が示唆される。すなわち、

労働者階級が現に被っている「未曾有の全般的苦悩」の直接的原因は「人間労働を省力化するための機械的イノベーションがここ20～30年の間になされた驚くべき進歩にある」のだが、しかし、「こういう有用なイノベーションが有害になり、矛盾した結果をもたらすのは、きわめて誤って構成された社会機構」によるのであるから、既存の社会機構=社会システムを改革して、「科学的、機械的な能力の拡大が確実に人類全体に最高の利益をもたらす」ようなより良き社会システムを創造しなければならない。

では、そのより良き社会システムとはどのようなシステムなのか。それは「相互協同の計画」を採用した結果、次のような利益と富をもたらすことができるシステムである。すなわち、「2つの金銭的利益」と「新しい富」をもたらすシステムである。前者は、「第1に、個人的生活の場合は小さな小売店で少量しか - それもしばしば掛買いで - 手に入れることができない食料品や他の商品を、(集団的な共同生活によって可能となる)現金払い方式によって卸売価格で購入することで生みだされる節約、第2に(集団的な共同生活に

で平素の職業に従事している人たちによって享受されることである。(したがって)協同経済組合の第1の - というのは、もっとも達成可能であるから - 目標は、卸売価格で食料、衣服および他の生活必需品を購入するための資金を形成することである。この他に、協同経済組合は、失業した組合員のために雇用を創出すること、病気の組合員や高齢の組合員とその家族に生活資料を供給すること、宗教的・政治的中立を保証することなどを目標としてあげている³⁾。

『委員会報告』と『エコノミスト』とに見られるように、ムーディたちの協同経済組合は、一方で - 集合家族形式であれ - コミュニティの建設を目指し、他方では農業や製造業における生産と取引によって生みだされる金銭的利益や他の経済的利益を追求する、というロッチデールに繋がる協同組合運動における「2つの発展流」⁴⁾を創りだした。この「2つの発展流」こそ、近代協同組合運動の流れを形づくる出発点となるのである。そして前者の流れはコミュニティ建設の運動を展開し、後者の流れは労働者生産協同組合型運動や消費者協同組合型運動を展開して、協同組合運動が労働者階級の人たちによって社会変革の運動と見なされていくようになるのである(現代のモンドラゴン協同組合企業体も、ある意味では、コミュニティの建設と協同組合企業による経済的利益の追求とを継続的に展開している、社会変革・進歩の運動である、と見ることができる)。だが、協同経済組合は、そのような発展流による協同組合運動の進行方向を決めるのにはあまりに力不足であった。この仕事は1824年に創設されるロンドン協同組合に託されるのである。

ロンドン協同組合 (1824 - 1834 年)

オウエンがアメリカでニュー・ハーモニー^{コミュニティ}共同体を建設するためにイギリスを去った1824年にロンドン協同組合が創設される。そしてロンドン協同組合は、協同経済組合が遺り残した大きな仕事に挑戦することになる。ロンドン協同組合は「ロンドンの50マイル」⁵⁾以内にコミュニティを建設する」計画を掲げることで、協同経済組合の仕事を受け継いだのである。協同経済組合の機関紙『エコノミスト』に代わるロンドン協同組合の機関誌『協同組合雑誌』(The Co-operative Magazine and Monthly Herald)が1826年1月に刊行される(『協同組合雑誌』は1830年3月をもって廃刊)。オウエンは、この『協同組合雑誌』(Vol.2, No.11, November 1827)の脚注で、ジェームズ・ミルやマルサスに対置して、自分たちを「社会主義者」(Socialists)と名乗り、イギリスにおける「社会主義者」の語源をつくった(後にオウエンは、『ニュー・ハーモニー・ガゼット』で「社会主義」(Socialism)という用語を使用している)。

オウエン -- オウエンはアメリカとイギリスをしばしば行き来していた -- とウィリアム・トンプソンが指導者であったロンドン協同組合は、ニュー・ハーモニーやオービストン・コミュニティの実験を観察するだけでなく、「ロンドンの50マイル以内にコミュニティを建設する」計画を立て、1826年2月には「4,000ポンドの株」を集めた、との記録が残されている。この年の中葉にオウエンが帰国することから、この計画が着手されると思われた。実際のところ、ロンドン協同組合の組合員は、ニュー・ハーモニーやオービストンが破局をむかえるまでは、彼らの計画も前進すると確信していたのであるが、コミュニティの建設基金の目

である - によって組織された「共同交換組合」(Union Exchange Society)がそれである。キングは共同交換組合についてこう述べている。すなわち、各組合員は、各自の職業で生産できる品物を持ち寄って相互に取引し、その取引に一定の比率を課してコミュニティ建設の基金を確保すると同時に、得られた残りの利潤を組合員の間で平等に分配し、かくして「買い手と売り手の間に共通の利益をつくり」だすのである。この共同交換組合は、オウエンの「労働交換所」(Labour Exchange)を含む1830年代における協同組合運動の特徴とロッチデール公正先駆者組合以後の労働者生産協同組合運動の萌芽的特徴を併せもっている点で非常に興味深い。

前者の特徴は、各組合員が生産した品物を各自持ち寄り、その品物に価格を付けて相互に取引するという - 先回の「物語」で述べた - オウエンの「自然的価値標準」(これはオウエンの「労働価値」説でもある)に従った「労働交換所」を先取りしている、ということである。事実、キングは、「われわれの指導者オウエン氏の助言に従って」共同交換組合を設立した、と『協同組合雑誌』(No. 12, December 1827)に記している。

後者の特徴は、組合員の間で利潤を分配したことである。1820年代から1840年代におけるオウエン主義の協同組合運動は、基本的に、協同コミュニティを建設して新しい社会経済システムを打ち建てる、という社会変革を目的としていたので、消費者協同組合型運動にしても労働者生産協同組合型運動にしても、獲得された利潤はコミュニティ建設の基金として蓄積することが原則であり、組合員の間での利潤分配を認めていなかった。しかし、周知のように、先駆者組合は組合員に利潤を分配することで発展し、また1850年代以降の

協同組合運動は消費者協同組合も労働者生産協同組合も利潤を分配するのが一般的となり、両者はやがて利潤分配をめくって路線対立するまでになる。1820年代後半のこの時期に共同交換組合が組合員の間で利潤を分配したことは、先駆者組合を予兆させる同時に、オウエン主義を思想的基礎とするロンドン協同組合がなお「自然発生的な生活防衛的組織」としての初期協同組合運動の母斑を引き摺っていたことを表現していたのである。

ロンドン協同組合は1834年に解体するのであるが、オウエンやトンプソンは1830年代前半の時期に「オウエン主義の世界」を代表する協同組合 kongress に勢力を傾注する。しかし、その前に、プライトンのキング博士がイギリスの協同組合運動に大きな転機をもたらす試みを行なったことを記さなければならぬ。いずれにしても、1820年代末から1830年代前半におけるイギリス協同組合運動は、キング博士の思想、オウエンの「労働交換所」、協同組合 kongress、ララヒン・コミュニティの実験などさまざまな試みと転換が入り交ざる、「螺旋的発展」の時期を通過していくのである。今回はこれらの試みや実験について語ることにしよう。

1) 五島 茂『ロバート・オウエン著作史』、東洋書房。

2) *The Economist*, No.1, 1821, title page.

3) *The Economist*, No.39, October 20, 1821, pp.202-206.

4) 五島 茂『ロバート・オウエン』、家の光協会、p.218.

5) 1マイルは約1,600メートル。

6) *The Co-operative Magazine*, No.5, May, 1827, pp.222.